第35号明・愛[特別号]
NPO法人
メイアイヘルプユー
発行日2013年8月12日
特定非営利活動法人 メイアイヘルプユー会報
発行人　代表理事　新津ふみ子

河東眞澄さん(元・釜石市教育長)、古川明良さん(同・次長)をお迎えしての内部研修会レポート

事務局長　鳥海 房枝

7月12日、お2人をお迎えして念願のナマの“釜石レポート”をしていただいた。当日の参加者は約30名に上り、研修会を「ホームページで知って参加した」という非会員の方も複数人いた。

釜石市の学童・生徒が『東日本大震災』の津波で命を奪われなかったことを、世界中のマスコミが『釜石の奇跡』として大きく取り上げてきた。しかし河東氏は、これが決して「奇跡」ではないこと、そして「東日本大震災があと3年後であれば、市民の命をもっと救えたのではないかと思う」と言う。『津波てんでんこ』が注目されるなかで、当時、教育長としてマスコミの前にあえて登場しなかった河東氏が、私どもの内部研修会の講師を引き受けてくださったことに感謝しつつ、当日の研修会の内容の要旨を皆さまにお伝えしたい。

＊

「助けられる人から助ける人へ」。これは防災教育の結果、子どもたちがたどりついた文言である。

釜石は、津波のみならず先の大戦では海側からの艦砲射撃、そして大火災など、幾たびもの壊滅的な被害があったにもかかわらず、そのつどよみがえった地域である。にもかかわらず、釜石に対する市民の意識はマイナス思考が強くなっていた。一方、教員も地元出身者は3割程度で、津波被害を含めた釜石の歴史を知らない教師が多く、子どもに真の防災教育などできない現状にあった。そこで、学校から元気を発信する、釜石に誇りをもてる人づくりを目指し、地元の歴史を学ばせる教育に取り組み始めた。具体例としては、日本で初めて溶鉱炉をつくった大島高任[1]を知る、たたら製鉄[2]の製法を各学校で体験実施する、などである。また、防災課と教育委員会とで協議し、「津波は必ず来る！」ことを前提にした防災教育に着手した。そして、それから5年目、あの『東日本大震災』に見舞われた。

防災教育の特徴は、子どもと教員が通学路の途中で津波の襲来が予想できたときに、どのように逃げるかを想定して、学区内を歩いて探検しながら逃げ道を確保したことにある。また、防災を勉強する時間を特別には設けず、国語・算数などの学習時間のなかに「防災」を取り入れたカリキュラムを独自に作成して取り組んできた。このカリキュラムは学年に応じたものになっており、教育現場で注目されている。

『ぼうさい甲子園』[3]に参加した市内の中学・高校は、具体的な取り組みを発表し、毎年各賞を受賞するなどしてきた。これも今回の震災発生時の対応に活かされている。『津波てんでんこ』は、「人のことは構わずに勝手に逃げる」といった誤解も一部にはある。しかし、この真の意味は「大切な人は必ず逃げている、だから自分も逃げる」というお互いの信頼のうえに成り立つ先人の知恵が詰まった言葉と考えである。

『阪神・淡路大震災』からの学びは大きい。その経験から振り返ると、震災直後から子供たちは本当に健気に頑張る。その頑張りによるストレスは3～5年後に出ている。釜石の子どもたちへの影響が出てくるのもこれから、と考えている。また、高齢者は仮設住宅でコミュニティを失い、格差が増大している。これも大変気になっている。

震災2年後に『千年後への伝言』を出版した理由は、「必ず津波は来る」を前提に震災を体験した者として、いかに逃げるかの防災文化の継承である。

津波の被害は大きい、しかしながら先人はそれから立ち上がってきた歴史がある。現在、防潮堤の再建と住民の居住場所を高台移転させようとする風潮がある。高い防潮堤で津波を防ぎ、それを克服しようとする考えには違和感をもつ。問われているのは自然との共生であり、海の恵みを享受しながら、その一方で、津波は来る、そのときは逃げる、だから逃げ道を確保しておく実践こそが重要と考える。

＊

たくさんのスライドを用いながら、教育長として防災教育を始めた理由、千年後への伝言をまとめた理由、そして震災後の課題などをお話してくださいました。本当にあっという間の90分でした。その後の懇親会には15人ほどが参加、「研修会パート2」のような時間でした。改めて『千年後への伝言』を読み直しております。まだお読みになっていない会員の皆さま、残部が少々あります(本体1,500円)。お送りしますので事務局までご連絡ください。

[注]1)大島高任(おおしまたかとう、1826～1901):幕末から明治の鉱山学者。釜石に日本初の商用高炉を建造し、釜石製鉄所の基礎を築いた。
2)たたら製鉄:鞴(ふいご)を用いて、製鉄に必要な空気を送りこむことからついた名称。原型である「たたら吹き」は、日本刀のための玉鋼を製造する日本独自の製鋼法である。
3)ぼうさい甲子園:毎日新聞社、兵庫県、(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構が共催で実施する、学校や地域で防災に取り組む子どもや学生を顕彰するイベント。

35号のガイド

1P:河東眞澄さん、古川明良さんをお迎えしての内部研修会レポート
2～4P:【内部研修会】東日本大震災釜石報告スライド資料一覧
5P:内部研修会レポート
6P:内部研修会レポート／お便り紹介:『千年後への伝言』を読んで／編集後記

7月12日(金)内部研修会
東日本大震災釜石報告スライド資料一覧

※河東眞澄さんのご厚意により、当日のスライドの内容をすべてご紹介します。

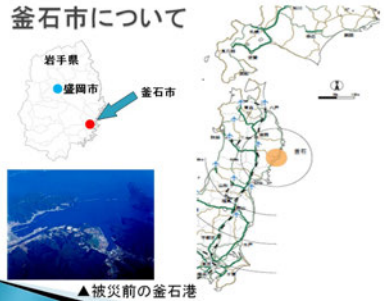
釜石市マスコットシンボル

助けられる人から助ける人へ

防災教育を始めた理由
子供達の行動
震災後の取り組み
課題等

釜石市教育委員会 元教育長 河東眞澄

1 釜石市について



▲被災前の釜石港

ラグビーの町

新日鉄釜石V7連成

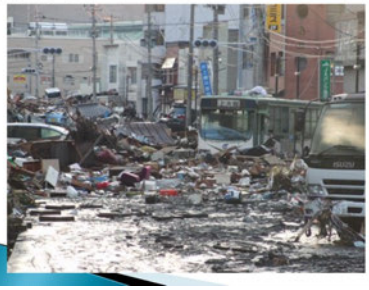
現在の釜石シーウェイブス

震災前と後の釜石市の様子

- 被災後の大渡町　茶色の部分が瓦礫や泥など

震災前の只越町(釜石小の学区)

震災直後の大町(釜石小の学区)



大渡町付近(釜石小の下付近)

鵜住居小学校の震災前

鵜住居小学校の震災直後

釜石東中学校の震災前

釜石東中学校の震災直後

想定外の波の高さ　(実際はこれ以上に)

今回の震災における浸水区域

釜石の現状

釜石市の人口

	昭和38年	平成23年(震災時)
人口	93，000人	40，000人
児童・生徒	28，000人	3，000人

学校数

	平成13年		平成23年4月現在
小学校	18校	ー	9校
中学校	9校	ー	5校

教職員の出身地

・地元出身者　約30パーセント 他は内陸
・管理職と事務職員は3年で異動
・一般教諭は5年で異動

市民の意識
マイナス思考　ー「釜石はだめだ」
東北各地から　愛着心薄い
子供たちに夢がなくなっている
家族の会話の重要性

2 学校から元気を発信する（地元学の推進）

教職員と子供たちで地域を歩く

①ものづくりの文化

近代産業の発祥地 － 1857年
日本初の様式鉱炉の完成
1880年まで運用

大島高任（1826年6月16日～1901年3月29日）
盛岡出身 明治維新後の岩倉使節団に同行

大島高任

鉄の記念日 1957年制定

橋野三番高炉

三陸わかめ

養殖から加工

先人の努力と
工夫

②災害から立ち上がる不撓不屈の精神

津波の歴史

明治三陸地震大津波
1896年（明治29年） 死者6，687人

チリ地震津波
1960年 昭和35年
死者 三陸沿岸全体で142人

昭和三陸地震大津波
1933年 昭和8年 死者183人

▸艦砲射撃

米軍軍艦来襲

1945年7月14日、8月9日
米軍による2度の艦砲射撃を受ける

壊滅した大渡町

釜石の大火事 1976年（昭和51年）
浜町で戦後最大の大火災発生

企業の合理化
釜石製鉄所の合理化 1978年（昭和53年）
間接的に
－ 地域経済活動の停滞
－ 人口の大幅な減少

釜石鉱山の閉山等々

不死鳥の如く立ち上がる不撓不屈の精神

③地元学

地元にあるものを探し、新しく組み合わせたりして、町や村の元気を創る学び
出前講座の実施 ゲストティーチャーの活用

実践例 文化財ツーリズム 橋野、栗林地区
アイアンロード等 歴史の演劇化
たたら製鉄や農漁業の体験学習
アイアンマスター（鉄の検定）

大島高任ゆかりの地、市民も地元の歴史文化遺産に関心。
－ 三浦命助の碑、橋野高炉跡（国指定史跡）等見学
－ 吉本哲郎講演（地元学ネットワーク主宰）

3 市の防災課との連携
加藤康子氏と片田群馬大教授との出会い

加藤康子氏
・都市経済評論家
・九州・山口の産業遺産群世界遺産構想プロデュースを手がける
・橋野高炉の世界遺産登録に尽力

片田敏孝氏
群馬大学大学院工学研究科
社会環境デザイン工学専攻 教授
広域首都圏防災研究センター所長

釜石市の防災課との連携
－ 地域への広がり

文部科学省指定
－防災教育に関する指導・助言

4 災害と教育行政
教育委員会の取組みから

自分の命は
自分で守る力を子供たちに

昔からのことば
「津波てんでんこ」
の理解と実践

キーワードは 信頼しあうこと

（1） 教職員の意識改革

① 教員向けアンケート調査実施 平成17年

問3「あなたは釜石市にどの程度の津波が来ると予測されているのか知っていますか。」
知っている 56．7% 知らない 43．3%

問4「あなたは学校の授業等で、津波に関する話を児童・生徒にしたことがありますか。」
毎年している 24．0%
何度かしたことがある 40．4%
したことがない 35．6%

職員の共通理解を図る必要

（2）片田教授との連携

「釜石市には地震・津波は必ず来る。その時に子どもたちから被害を一人も出さないような取組みをすべきである。」

「地震・津波を怖がるのではなく、海の自然を享受できる釜石では、津波があったら逃げることを教え続けること。」

津波に備えることが当たり前という文化の形成

拠点校とリーダー養成
・文部科学省で募集した事業に市として立候補

テーマ① 動く津波ハザードマップの高度化
「動く津波ハザードマップ」を改良し、疑似避難を体験できるツールとし、防災教育に取り入れる。

テーマ② 地域防災リーダー養成研修プログラムの作成・実践
「防災教育に携わる人材の育成を目的とし、防災の知識、災害時における具体的行動を伴った研修プログラムを作成し、実践する。

テーマ③ 子どもたちへの津波防災教育プログラムの作成・実践
教員が児童生徒に防災教育を実施するためのプログラムを開発・実践し、児童生徒への防災教育をとおして、家庭の中で津波避難について考えるなど保護者の防災意識を高めることにつなげていく。

テーマ④ 子ども津波避難の家設置
児童生徒が登下校中などに津波避難の必要が生じた場合、子どもの避難を手助けしてくれる、子ども津波避難の家を設置し、地域住民が手助けして津波避難の仕組みをつくり、地域全体が避難することの体制をつくる。

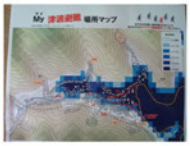
①②省略
子どもたちへの津波防災教育プログラムの作成

防災教育WGにて作成した
津波防災教育マニュアル
（全90頁）

▪モデル小中学校6校の教諭で構成するWGメンバーにより、授業で使用する津波防災教育手引きの作成に取り組みました。

▪22年度以降は、小・中学校において順次、学校教育計画に「津波防災教育」を掲げ、手引きを使用した取り組みを行っています。

防災マップづくり



鵜住居小学校では、津波防災学習の後で、下校時を使って通学路の安全確認をしながら自分の防災マップを作っています。

▪ 平田小学校3年生の授業参観

津波のDVDを視聴した後に、手書きの絵を使って場面ごとの注意事項を児童に確認しました。

子ども津波避難の家設置

▪地域の協力を得て設置に向けての懇談会を実施
▪避難の家協力者募集（モデル地区：約100件）
▪ステッカー作成（冬休みの課題として東中学校生徒にステッカー作成を依頼）
▪協力者 津波避難勉強会

市内小中学校での共通した取組み

・日常、登下校時の避難所確認

・発達段階に応じた津波の学習

・災害の歴史学習

・実践交流会　全教職員での確認

学校の実状に応じた取り組みと訓練

釜石東中学校の取組み

「EAST-レスキュー」

East：東中生

Assist：手助け

Study：学習する

Tsunami：津波

東京大学　玄田有史教授　希望学

EAST-レスキューで目指すもの

1. 自分の命を自分で守る
2. 助けられる人から助ける人へ
3. 防災文化の継承

EASTレスキュー

- 防災オリエンテーション
- 第1弾　小中合同避難訓練
- 第2弾　宮古工業高校から学ぶ
- 第3弾　安否札1000枚配布
- 第4弾　防災ボランティースト
- 第5弾　EASTレスキュー隊員1級合格者

第1弾　小・中合同避難訓練

助けられる人から助ける人への第一歩

第2弾　宮古工業高校から学ぶ

伝えることの大切さを高校生から学んだ

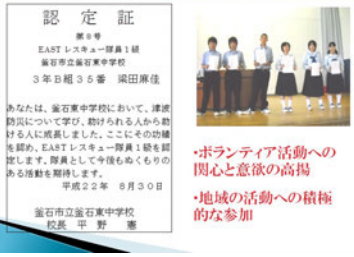
第3弾　安否札1000枚配布

第3弾　安否札1000枚配布

第4弾　防災ボランティースト

- 生徒会・委員会活動
- 縦割り10グループ
- 体験活動中心
- 地域の方との交流
- 専門家の話を聞き学びを深める機会

第5弾 EASTレスキュー隊員1級合格者



・ボランティア活動への関心と意欲の高揚

・地域の活動への積極的な参加

釜石小学校の取組み

保護者や地域・市防災課を取り込んだ避難訓練（登下校時）

下校途中を想定した訓練。防災行政無線からの緊急地震速報と津波警報の放送が流れ、近くの避難場所に避難

東日本大震災から復興へ

阪神淡路の教訓を生かす

子供たちの　心　体　学習

全国からの支援に感謝

関西地方の取り組み　早い

学校教育　4～6月に30人の臨床心理士等

子供たちのがんばり

避難場所　学校　非行や不適応の減少

支援のあり方　感謝

被災地との連携　必要な支援とは

教育環境の整備

取り組みの中で

校庭　通学路　通学手段の確保

（仮設住宅　避難所）

昼食の確保

子供たちの遊び場の確保（心のケア）

校庭（仮設住宅ダメ）　体育館　公園等々

教職員の負担の軽減（被災者　避難所）

心と体

諸々の温度差

5　課題等

子供たちの目線　意識の変化

地域の目も → 地域の子供　地域の学校　連帯感

復興が遅れる中で → 地域コミュニティー崩壊の危機

自然との共生の欠如

新しい格差　体力の衰え　ストレス

児童・生徒がマニュアルを超える行動

教職員・保護者・地域の意識改革の継続

命（津波）てんでんこの大切さ

避難訓練の見直し（想定外を想定して）

通学路等　日常の安全確認　安全マップ（保護者の確認）

引き渡しの見直しと協力要請（日常の信頼関係づくり）

風評被害をなくす手立ては

大震災の教訓を風化させない取り組み

- 防災は津波だけでない　人為的災害も
- 郷土の歴史
- 先人の知恵　今回の大震災で確認
- 学区内の探検（歩く）
- 副読本の活用　千年後への伝言

身近な地域の学習を大切に

釜石の奇跡は奇跡ではない

当然するべきことをしただけだ

これが

釜石東中学校の子どもたちの言葉でした

ご清聴ありがとうございました

内部研修会レポート
河東さんの講義で教えられたこと、それは“安全管理に取り組むリーダーシップ”

代表理事　新津 ふみ子

7月12日、待ちに待った話を身近で聞くことができた。河東さんと古川さんのお話である。

河東さんは、釜石市教育委員会の元教育長であり、当然のことではあるが教育者である。話の内容は、歴史的に繰り返し襲ってくる災害はこれからも繰り返されることを前提に、教育委員会として「災害と教育行政」に取り組んできた経過を具体的に話してくれた。地震・津波は必ず来ることを前提に、将来のある子供たちにとって何が必要かを考え、そして実践している。「自分の命は自分で守る力を子供たちに」を課題とし、昔からの言葉『津波てんでんこ』の理解と実践に取り組んだ。「教育者ってすごいなぁ」というか、すごい教育者に会っているのかもしれない、と感じた。

河東さんの話のなかで、もう一つ私が教えられたことは、安全管理に対するセンサーである。「阪神淡路の教訓を生かす」を繰り返し言葉にした。災害後は、仮設住宅や避難所から通学するための通学路や通学手段の確保、そして子供たちの遊び場の確保の重要性、そのために校庭には仮設住宅を建てさせなかったこと、などなど。

実は、福祉サービスの第三者評価の評価項目に「管理者の責任とリーダーシップ」「安全管理への取り組み」がある。まず評価項目「管理者の責任とリーダーシップ」は、全社協版の内容である。判断基準は、「管理者は、自らの役割と責任を職員に対して明らかにし、理解されるように積極的に取り組んでいる」であり、評価の着眼点（確認項目）の一つに「有事における管理者の役割と責任の明確化」がある。すなわち管理者はリーダーシップを発揮し、安全管理に取り組んでいるかを確認する項目である。次に東京都版の評価項目になるが、安全管理への取り組み態勢とその状況を確認する標準項目があり、その一つに「事故、感染症、侵入、災害などの事例や情報を組織として収集し、予防対策を策定している」がある。予防対策は前例から学ぶことが重要であり、組織として取り組んでいるかを確認する項目である。河東さんの話を聞きながら、私はこの評価項目を思い浮かべ、絵を書くように理解することができた。

会員、古川さんの話からである。自宅が津波でさらわれ、直後は仮家に住み、イライラした生活であったが、自分の家の確保ができ落ち着いてきたような気がする、というのである。住まいが人に与える安心感、落ちついた生活が課題に取り組ませ、前進させるのだと思った。改めて「住まい」の重要性を教えられ、４月の内部研修での『NPO法人自立支援センターふるさとの会』の瀧脇さんの話、ホームレス支援を思い出した。

私事になるが、実家・南三陸町志津川も津波でさらわれた。その後、姉とその家族は仮設住宅に住んでいたが、名前の違う町内に今年の5月、家を建て引っ越すことができた。姉たちは確かに落ち着いていた。姪は裏山に逃げたときのことをいまでも語る。振り向いたら家はなく、川になり渦を巻いていた、もう二度とあそこには行けない、と。

実に勝手なのだが、何やら私の心境は故郷をなくしたようなさみしいものがある。災害当事者にはなりきれないが、忘れないでいようと思う。毎年、釜石詣でをし、そして故郷の墓参りをして。

内部研修会レポート
たくさんの人と改めて東日本大震災を考える時間を共有しました

理事　川崎 千鶴子

7月12日（金）、メイアイヘルプユーの内部研修会では、河東眞澄氏、古川明良氏両氏のナマの“東日本大震災・現地レポート”をお聞きすることができました。古川さん（あえて「さん」とさせていただきます）はメイアイ通信の釜石レポートで熱い思いを語られていますので、多くの会員の方もご存じだと思います。河東さんには3月に釜石に伺ったときに『千年後への伝言』の出版パーティー直後にお会いしました。その折、『千年後への伝言』を編集しようという皆さんのパワーに圧倒されたものでした。

その『千年後への伝言』を読み、重い事実よりも、唐丹の方々の前へ進むためのこれからの家族や子供たちへ語り継いで生活をするための“力強さ”に私は感動しました。とくに、小学生や中学生が「なんてしっかりとした考え方を語っているのか！」とただただ感服してしまいました。あの大変なときを超えた人たちだからこそ、そのようなことができるのだ、とも思っていました。しかし、河東さんのお話のなかで「本当によくやった子どもたち」への愛情とともに、これから“心的外傷”の影響を心配している、との言葉にさらにショックを受けました。成長期の子どもたちには、大きな出来事が成長という変化をもたらすとともに、負の傷跡となることも忘れてはならないということでしょう。『千年後の伝言』をつくり上げた住民の皆さまの“前へ向かう力強さ”を信じたい気持ちになります。私にとっては、その発していただいたメッセージを東京で活動しているいろいろな人とたくさん分かち合うことが大切ではないか、と思っています。

お2人の貴重なお話のなかで、古川さんの言われた、自然のもたらす災害を封じ込めることではなく、自分を守って共存するための知恵が大事だということ、河東さんの、住民の意識を変化させ行動に結びつけるには、「子ども」を動かすようにすると成果が出るという言葉が印象に残りました。「子ども」が重要なキーワードだということを改めて認識しました。「これは私にも使える!!」と直感した、研修会の成果物です。いつも高齢者に眼がいっている私にとって、とてもインパクトのあるご意見でした。

この続きがまだまだあると信じています。またお話をお聞かせください。

ありがとうございました。

内部研修会レポート

今回の内部研修会では、特養『あいぜんの里』施設長の古川明良氏と、釜石市教育委員会元教育長の河東眞澄氏のお2人をお招きし、記録集『千年後への伝言』(編集:唐丹の歴史を語る会)の紹介と、映像による被災の様子を語っていただいた。津波は水の塊、壁がそのまま押し寄せてくるという。この表現は、体験した人たちが発することでその熾烈さが生々しく伝わるのだと思う。

河東氏のお話では、被災から2年余り過ぎ、子どもたちのストレスや仮設住宅に住む高齢者の孤立、これまで構築されてきたコミュニティの崩壊など、いくつかの問題点が指摘された。阪神・淡路大震災の教訓が活かされ、今回は、翌日には全国からボランティアが入り、その迅速さに驚いたという。とくに、臨床心理士が30人以上も入ったことは、子どもたちにとって何よりの救いであった。

一方で、過剰な支援物資であふれかえったという。処理にも困るが善意を無駄にはできず、過大な物資を抱え矛盾を感じたという。いまだに新入生用のランドセルがあり、中古のものは東南アジアに手間をかけて送っているそうだ。「結果的に釜石の業者は物が売れなくなった」ということも、お話を伺うまでは気づかなかった。

自分自身もこれまで市民活動に取り組んできた。今回の東日本大震災でも被災地支援を行った。その活動はどのようなものだったのだろうか。自己満足ではなかったのだろうか。教育委員会に了解を得たものの、同じように相馬市と南相馬市へ500個のランドセルを送ってしまった。そして、同じように余ったランドセルをアフリカへ送った経緯がある。現場は混乱していたことであろう。年度末であったため、集まったランドセルは全国から東北へ多量に送られたはずだ。われわれは、現地で支援している知人をつてに、岩手県の花巻、宮城県の石巻や亘理町、南三陸町等々、地元の役場や支援対策本部に連絡をつけながら、具体的に必要な品々を届けていたのである。また、岩沼では出張カフェを催し、冬に備えてコタツを届けた。徐々に顔の見える関係ができてきた。釜石市鵜住居日向地区の仮設住宅にエアキャップロールをトラックで運び、実際に現場を訪問した。つらい経験を抱えながら前向きに生きる気持ちが伝わり、逆に元気をもらった。立場を置き換えてみるといろいろなことが見えてくる。

10年ほど前、アフガンに衣類を送ったことを思い出す。偶像崇拝に配慮し、無地の衣類を選び、感染症から守るためすべてを洗濯する。ダンボールに中身を表記して船便に乗せる。自分の作業で頭がいっぱいになっているときに、「受け入れる側のボランティアの負担を考えてみてください」と、冷水を浴びせる一言をいただいた。自分の連絡先を書いたカードを箱の中に入れた。もしかしたら、受け取った人から返事が来るかもしれないと思った。

大規模な災害が発生したとき、支援物資が必要なのは最初の1、2週間である。物流が確保されると現地は支援物資であふれることであろう。メディアやネットなどの情報提供は、一部では活用されていたはずだ。しかし、緊急な状況のなかでは十分には伝わりきれない。常に反省が残る。失くしたものは大きいけれど、これから千年の道のりを歩んでいくための姿勢を学んだ。

(石川さなえ)

お便り紹介 『千年後への伝言』を読んで

『千年後への伝言』拝読いたしました。涙が止まらなくなりました。

「毎日が変わらぬ毎日であること」に感謝しなくては。

お忙しいことと存じます。お身体ご自愛ください。

老人保健施設『うらら』(山形県酒田市) 事務長
佐藤裕邦(会員)

＊

想像を絶する体験をした方たちの言葉をまとめた『千年後への伝言』を読み、発言される勇気とまとめられた編集者に頭が下がりました。

現在、先の大戦で戦地に赴いた人々の言葉をまとめております。決して話さなかった体験を、「いま伝えておかなければ」の気持ちに突き動かされて、と語ってくださいます。それに共通する心の揺さぶられ方です。

千年に一度の津波であるならば、千年先の人々にまで伝え継ごうとするタイトル、そして志の高さを感じながら読ませていただきました。

東京都在住 70歳・女性(非会員)

＊

『千年後への伝言』ありがとうございました。

気になっていたところを拾い読みしました。そして、忘れてはいけない、私たちへのメッセージを受け止めました。

ここ東海地方も、いつ大きな地震が起こるかわからない地域です。皆さんの言葉が、私たちの備えだと強く感じました。

いま、聖隷浜松病院で初期研修を受けている研修医は、地域研修の一環として釜石に派遣されています。震災の後の復興の様子を目の当たりにしているようです。撮影した写真などをとおして、それを報告してくれています。

静岡県浜松市 山下 いづみ(会員)

❒編集後記❒

今回の会報は「特別号」です。法人として会報を発行するようになって「特別号」の発行は初めてのことです。是非皆様に東日本大震災発生当時から現在までを知っていただきたく、あえて特別号を発行することにしました。期日が厳しい中で編集担当の鈴木さんには、大変ご無理をお願いしました。皆様の心に届くことを願っております。

さて次回の内部研修会は9月3日、藤井賢一郎氏による「わが国の福祉の行方、そして人財育成は」です。どうぞご参加ください。 (鳥海)

みなさまからの
社会福祉情報お待ちしています。(編)
メールアドレス:meiai@smile.ocn.ne.jp
＊HPアドレス:www12.ocn.ne.jp/~meiai

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-31-9
シーバード五反田401
(03)3494・9033
NPO法人 メイアイヘルプユー